

イ. 弓田円蔵さんの努力

弓田円蔵さんは、1814年に塩生の呉服商しおのう ごふくしょうの家に生まれました。円蔵さんは、倉村や檜原の人々の苦しい生活を見て、何とかこのあれ地に水を引いて田ができないものかと考え、役所に何度も足を運び、かたい決心で村の人々と相談そうだんを重ねました。そうして、工事費2500両ひ（今のお金で約1億1250万円）を自分で出そうという円蔵さんの熱意ねつ いに動かされて、村の相談がまとまり、1863年、工事にとりかかることになりました。

ウ. 苦しい工事かんせいと完成の喜び

工事で一番たいへんだったのは、長野向かいの取り入れ口から今の八幡橋はちまんばしまでの2 kmの間でした。ここは岩のがけが多く、岩をほって水路をつくらなければならぬからです。



▲昔のおもかげをのこす円蔵せき

円蔵さんと村の人々は、水がうまく流れるよう、夜にはちょうちんを使って高さを正しくはかりました。岩のがけに木を積んで燃やし、かたい岩をもろくして、石のみで岩をほり進めました。雪どけ水や大水のために、工事のとちゅうで水路がこわされたこともありました。そのため、たった2 kmほり進むのに8年もかかりました。

円蔵さんは、くじけそうになる村の人々をはげましながらか、血のにじむような苦心くしんのすえ、のべ20,994人の人手と21年の年月ねんげつをかけ、ようやくせきを完成させました。

初めて大川の取り入れ口から水を引き、せきに水を流した日は、村中の人々がせきのほとりに立ち、完成を喜び合ったということです。